



『初心忘るべからず』

宮崎県

朱雀館道場

中学1年生

上米良

凜

「黙想一!!」号令がかかると道場が一瞬にして静まりかえる。こういう毎日の「無念無想」の瞬間が、私は好きだ。

私は4年生から剣道を始めた。真面目だけがとりえの私は、基本だけを中心に稽古をしてきたが、去年は半年以上Aチームに入れず、Bチームばかりだった。試合に出るのは年下の5年生。私もAチームの象徴である赤銅をつけていつか必ず試合に出たいと、暑い日も寒い日も雨の日も休まず稽古に行った。そして先生からの教ををよく聞き、基本だけを真面目にコツコツと努力をした。

寒い冬のある日、館長先生が「試合をやるぞ。」とおっしゃって、道場内で試合をすることになった。その日は道場生のほとんどが稽古に来ていた。みんなが私達の試合を見ていたし、レギュラーのかかった試合だと思ったのでとても緊張したのを覚えている。その張りつめた空気の中で、私は自分を信じ平常心で試合に臨んだ。試合の結果は、それまでの努力が実り、見事に私が1位でレギュラーになったのだ。悔しくて、情けなくて悲しい思いをした日々の中でも、笑顔は忘れず、自分に負けず努力をし続けた。その目に見えない努力がレギュラーのかかった試合で成果として表れた事が、言い表せないほど嬉しかった。そして、念願だったAチームの赤銅を持って帰った日は、枕元に飾って眠りについた。

私は今、中学生になり、剣道部に所属している。部活でもレギュラーに選ばれ、私は試合で勝つ事が楽しくなってきた。その一方で1年のしかも背が一番低い私がレギュラーに選ばれた時、泣いている先輩もいた。私が6年生の頃、努力をしてもずっとBチームだった時の悔しさがよみがえった。私は、その気持ちは痛いほど分かるのでつらい。でも今となっては、このような私しか知らない悔しい思いは、私だけの財産となっている。だからこそ私が試合に出るからには、稽古も試合のような真剣な気持ちで取り組み、チームのために勝とうと心に決めた。

しかし、中学生になって3ヶ月が経ったある日、館長先生から「面を忘れてしまったのか！小学校の頃の方がよっぽどいい面を打ちよったぞ!!」と言われた。その時、私はハッとした。小学校の頃のBチームからAチームに上がった時のような素直な気持ちとまっすぐで速い面を忘れてしまっていたのだ。背の低い私は、なかなか面が取れないので知らない間に小手や胴などで一本が取れるような、勝つための稽古をするようになっていたのだと思う。だから注意された時から、勝つ事より基本を第一に本数は少なくともまっすぐで素直な力強い素振りをするように心がけた。中学校は勉強もたくさんしなければならぬし、部活もある。それでも部活の後に道場に行き、体がきつくて休みたい時も先生が来て下さる日は必ず掛かりに行き、何度も飛ばされ、家では時間をみつけて素振りもした。するとしばらくたったある日、稽古で館長先生が「小学校の頃の面打ちに戻っているな。いいぞ!!」と私におっしゃって下さったのだ。私は先生からの教を素直な心で聞き、直そうと努力し、またそれを認められた事でとても自信がついたし嬉しくて涙が出た。そして、6年生の後半でAチームに選ばれたのも試合に勝ったからではなく、それまでの稽古に取り組む態度や姿勢、努力を見て下さっていたのかもしれないと思った。

これからも勝負事なのでももちろん試合に出たいし勝ちたい。でも目の前の一本だけでなく、一本にたどり着くまでの日々の努力、そして何事にも素直な心と基本を忘れず「初心」に帰ろうと決心した。

「初心忘るべからず」今の私、そしてこれからの人生の中で一番大事な事かもしれない。私はこの言葉を胸に、これからも大好きな剣道を私らしく続けていきたい。